

朝日新聞デジタル > 記事

犬164匹を8畳2間で 国内最大規模の多頭飼育崩壊か

会員記事

榊原 穰和 2020年11月2日 19時42分

シェア ツイート ブックマーク メール 印刷



【動画】出雲の民家で犬164匹の多頭飼育崩壊 = 公益財団法人どうぶつ基金提供



多頭飼育崩壊が起きている部屋の様子 (どうぶつ基金提供)



鳥根県出雲市の住宅街にある民家で、164匹の犬が8畳2間で飼われていることがわかった。公益財団法人「どうぶつ基金」（兵庫県芦屋市）への取材で分かった。繁殖が繰り返され、適切に飼育できない多頭飼育崩壊が起きているという。基金によると、「一般家庭での多頭飼育崩壊としては国内最大規模」という。

基金は、管轄する県出雲保健所などと連携して、9日にも全頭を民家から引き出し、10日から不妊手術とワクチン接種をするという。基金が手術代やワクチン代を引き受けるという。

基金によると、犬は主に8畳2間の平屋で飼われており、飼い主の家族3人は平屋や隣の民家で暮らしているという。

基金の佐上邦久理事長は10月、飼い主の許可を受け飼育場所の平屋に立ち入ったという。犬は中型犬程度の大きさで、餌が足りないためにやせていて、一部の犬は他の犬のふんを食べていたという。「成犬のふんが出るのを子犬がお尻の後ろで待っている、悲しい状態だった」という。

基金によると、飼い主の家族は、40年ほど前に野良犬1匹を飼い始めたところから、次々に増えてしまったと話し、不妊手術などには協力する態度を示しているという。

近隣住民によると、30年ほど前から多頭飼育の状態だったといい、頻繁に犬の鳴き声が聞こえ、洗濯物が干せないほど臭いがするときもあるという。近くの公園では、臭いがひどく住民が行くのを控えるようになってしまったという。

立ち入り検査で頭数把握できず

多頭飼育崩壊はなぜ見過ごされてきたのか。

ここから続き

複数の住民によると、県出雲保健所や出雲市にたびたび連絡したが状況は変わらなかったという。同保健所によると、住民から連絡があると、飼い主の家を訪問し不妊手術をするよう指導してきたという。しかし、家族からは犬の数は「十数匹」と説明され、玄関先での指導にとどまっていたとしている。

住民らが今年7月、保健所が立ち入り調査をするよう求める署名を県や出雲市などに提出。保健所は同月、動物愛護法に基づいて立ち入り検査した。ただ、汚物が適切に処理されていたなどとして、住民らには「虐待はなかった」と報告。飼育頭数も正確に数えられていなかったという。

ただし、悪臭など周辺の住環境への影響が同法に抵触しているとして、県がどうぶつ基金に犬の不妊治療を要請。要請を受けた基金の佐上理事長が10月に飼い主の家に立ち入って初めて多頭飼育崩壊の実態が分かったという。

こうした事態を受け、近隣住民の有志らは11月2日、保健所の対応の仕方をただしたり、問題を解決するための話し合いに住民らを加えたりするよう求める要望書を県に提出した。

保健所を管轄する県薬事衛生課の田原研司課長は、住環境が改善されていないことについて「申し訳なかった」と陳謝。話し合いの場にも住民らが参加する方針を示した。

佐上理事長は「数年前から苦情があったのに、虐待を認めず、深く関わらなかった行政の対応の結果、この数になったのでは」と話す。

多頭飼育崩壊は社会問題化しており、6月1日施行の改正動物愛護法で、劣悪な飼育をする飼い主に自治体が立ち入り検査できるようになった。

不妊手術などを終えた犬は、今後引き取り手を探すという。どうぶつ基金は、不妊手術や餌代などにかかる費用や物資の寄付を募集している。詳しくはウェブサイト (<https://www.doubutukikin.or.jp/>) へ。(榊原織和)